

ウィリアム・アーヴィン著

ウォルター・バジョット (2)

訳： 渡 辺 弘
立 川 順 子

第二章 血氣盛んな青年時代

バジョットはオックスフォードやケンブリッジには入学しなかった。彼の父親が宗教テストを課する両大学に反対したためであった。残された唯一の選択の道は、ロンドンのユニヴァーシティ・カレッジで、彼は1842年の10月初めに入学した。彼の特異な資質にとって、これ以上適切な学問の場はありえなかったであろう。ユニヴァーシティ・カレッジは彼に幅広く自由なカリキュラム、有能な教授陣、そしてとりわけ、大都会にきわめて近接していることの利点を提供した。

ウォルター・バジョットは大都会でその才能を開花すべく生まれた人間であった。彼は孤独で叙情にひたる反社会的な天才たち、自己の内面の存在の現実化と表現の中にひたすら生きている天才たち、彼らの審美的で飽くことのないエゴを拡大するための美しいが空っぽの——恐らく二、三人の崇拜する女性を除いて——世界を所有しているにちがいない天才たち、われわれが彼らの誇張された悲哀に抱く関心を素晴らしい自然描写でもって充足させてくれる天才たちの一人ではなかった。バジョットには英雄によくみられる自己中心性は全くなく、また詩的想像力もあまりなかった。さらにまた、喧騒の世界から静寂な学問の世界を区別する深淵越しに人類を眺めるあの学術的精神とも彼は無縁であった。彼はギゾー (Guizot) のような人物とは違っていた。ギゾーは自分の目に映るものが何であるかも知らずに通りを歩き、重大な体験をそれに影響され

ることもなく、通過した。彼は何ら實際的な知識ももたずに政治について才氣縦横に筆をふるったからではなく、長年、市民王（市民的議會主義王制を成立した7月革命（1830）により王となったオルレアン公、ルイ・フィリップのこと：訳註）の第一大臣を勤め、大政党を率いたのちはもはや政治について健筆をふるうことがなくなった点で驚くべき人物であった¹⁾。このような人物は易々と書物から学ぶので、人生をみつめようと思えることは殆どない。その成熟した人物（ギゾーのこと：訳註）は神童というものの犠牲者であり、彼の心は幼少期に結晶し、以後も同じ早熟な未完成な輝きで才気をほとばしらせる。バジョットはそのような人間ではなかった。彼はシェークスピアについて語っているように、体験型の人間であった。彼の生涯は絶えざる成長と発展であった。彼は実際、自ら生活している大都会の単調さのいくばくかを認識していた。何故なら彼は自らの目と耳を使用し、その大都会の背後にあの万人の認める不可思議さ——つまり人間性が存在することをけっして忘れることがなかったからである。バジョットと彼の選んだ学問の間には、何ら人為的障害はなかった。彼は陽気で機知に富み、人好きのする人間であり、社交を楽しみ、世間も彼との交際を享受した。彼は大都会の種々雑多な刺激を愛し、騒々しく危険に満ちたドラマにおいて、重要で積極的な役を演ずるだけの勇氣とエネルギーと機敏さの持ち主であった。同時に心の平静さと超然とした姿勢を心の片すみに常に保持していた。全ての思索者は孤高の精神をもたねばならない。そしてバジョットは内省的な人間であった。そのことは彼の多事多端な精力的生涯によっても、また激しい喜怒哀楽によっても阻げとなることはなかった。エリザ・ウィルソンに宛た彼のラブ・レターは、大変な精神的緊張の下においても、自らを冷静に観察していたことの類稀なる見本である。

ユニヴァーシティ・カレッジにおける最初の学期の初めに、バジョットは後年、卓越した編集者で文芸批評家となった、リチャード・ホルト・ハットンと出会った。「黒い大きな瞳と桜色の顔をした若者が今は亡きド・モーガン（De Morgan）教授にする質問の数々に私は強い印象を受けた」²⁾とハットンは述懐している。二人の若き学生は親友となり、すぐにロンドンの町の探訪に乗り出

した。彼らはチャーチスト（人民憲章運動同調者）と反穀物法の会合に出かけ、彼らの周りの雑多な人間の作り出す壮観さに心魅かれ、政治的論議の白熱した雰囲気胸を躍らせた。二人はコブデン（Cobden）、ブライト（Bright）、オコンネル（O'Connell）の演説を聞き、彼らの雄弁術をバーク（Burke）やマコーレイ（Macaulay）のそれと比較した。また下院を傍聴し、同じ政治家同志に近い関心でもって、ピール（Peel）、ラッセル（Russell）、ディズレーリ（Disraeli）、グラッドストーン（Gladstone）の経歴を研究した。ヘンリー・クラブ・ロビンソン（Henry Crabb Robinson）家の朝食会で彼らは名高い文学仲間と知り合いになり、バジョットの終生の親友となったアーサー・ヒュー・クラフ（Arthur Hugh Clough）はそのメンバーであった。彼らは当時の宗教論争において最も有名な人物の一人であるジェームス・マルティノウ（James Martineau）博士の著作を読み、後には彼と面識をもつようになった。

ロンドンのユニヴァーシティ・カレッジはオックスフォードとケンブリッジの両大学の宗教テストと、その教科課程の偏狭さに反対するグループによって1825年に始められた運動の所産であった。創始者たちはイギリスにおいて非常に多様な領域を代表している。詩人で理想主義者のキャンベル（Campbell）、大扇動家のブルーム卿（Brougham）、ユダヤ人の実業家、アイザック・ライアン・ゴールドスミッド（Isaac Lyon Goldsmid）、カトリック教徒を代表するノーフォーク公（the Duke of Norfolk）、ジョン・ウィショー（John Wishaw）のような英国国教反対論者の重鎮、そして最後にベンサム（Bentham）が最も著名である功利主義者たちがいた。H・ヘール・ベリオット（H. Hale Belliot）氏によれば

ロンドンにおける新しい大学へ最大の影響を与えたのは、エディンバラ大学であった……大学における研究テーマの範囲拡大、講義システム、学寮制の廃止、単一課程への入学、宗教テストの禁止、授業料により教授陣の給与を賄うこと、及び大学の民主的性格、これらは全てスコットランドの慣例の慎重な模倣であった³⁹。

——さらに付け加えるなら、ドイツとアメリカの慣例を真似たものといえよう。ロンドンのその大学はボンとヴァージニアの大学を模範として造られてもいた

からである。「ユニヴァーシティ・カレッジは医学部と芸術、法律、自然科学から成る、言わゆる総合学部とに分かれていた……総合学部に対して評議員会は系統立った教科課程を作製したが、全ての学生にそれに従うよう要求したわけではなかった」³⁾。バジョットが従ったように思われるこの教科課程は、ラテン語、ギリシャ語、論理学、人間精神に関する哲学、化学、自然科学、道徳及び政治哲学、政治経済学を含んでいた。バジョットのように完璧な予習と疲れを知らぬエネルギー、すばやい習得力の持ち主は、多くの科目について単に半可通の知識しか得られないという、このようなカリキュラムのもつ共通の危険性にさらされることは殆どない。彼の受けた教育の並はずれた健全さと多様性は、彼の著作の全てに明白に表われている。オックスフォードに入学していたなら、彼はよりいっそう名文家で、ニューマンの信奉者となり、保守主義者となったかもしれないが、ユニヴァーシティ・カレッジはバジョットをバジョットたらしめた基礎を築いたのであった。

彼が師事した教授は、数学と哲学のオーグスタス・ド・モーガン、ギリシャ語のジョージ・ロング (George Long)、古典言語学のT・ヒューイット・キー (T. Hewitt Key) らであった。これらの人物についてのバジョット自身の説明は、掛け値なしに最も多くのことを教えてくれる。

ド・モーガン教授は『独眼』で大きな色白の顔をしていて、態度はむしろポール先生に似ている。彼の講義は大変巧みで、まるで初めて数学について講義し、ここ10年間常に同じ分野を研究するということがなかったかのように数学に関心があるように見受けられる。

モールデン先生 (Malden) は、うわさによると、天然痘にかかる前は人並みの器量であつたらしいが、現在は前代未聞のあわれな容貌の人間となってしまった。私は先生が好きだ、先生の中では一番好感がもてると思う。彼はあらゆる種類の科目についての莫大なる知識をわれわれに授けてくれる。それに私が一、二度行ったように、君が彼のところに質問に行けば、全く歓迎してくれるだろう。彼はまるで蛾が長い間、その見慣れた住人であるかのようにみえる衣服を身につけている。ロング教授にはあまり好感がもてない。彼は全く面白味がなく、うんざりするほどというのではないにしても、非常に細心である。しかし彼がクラスにもっと慣れて、われわれも彼に慣れるにつれて彼は良い方向に変化するかもしれない⁴⁾。

別の折に彼はロング先生についてもっと好意的に書いている。先生から彼の母親は一通の手紙を受け取っていたのであった。

彼はよく言うような専門馬鹿とはまさに正反対である。彼は褐いた生氣のない顔つきの人間であるが、どれほどの労働でも体験する覚悟ができていように思われる。彼はかなり規律づくめの狭量な精神の持ち主であるけれども、きわめて頭脳明晰で、大変疑い深く、懐疑的である。彼は生真面目な顔をして何気なくユーモラスなことを言い、そのために私はよく思わず大きな声で笑いころげたものだ⁴⁾。

さらにウォルターはかなり横柄に次のような感想を述べている——「彼はいつもアリストテレスを引き合いに出すが、アリストテレスを古今東西で最大の思想家と考えているからなのだ」⁴⁾。しかし恐らくロング氏の熱中ぶりは、彼の学生には全く効果がなかったのだろう。何故なら真の意味でこれ以上のアリストテレスの学徒である作家はいないからである。これらの教授たちのうちで最も著名なのは、疑いもなくド・モーガン氏であったが、彼はウィリアム・ハミルトン卿 (William Hamilton) との形式論理学に関する論争ゆえに今でも記憶されている。彼のユーモア感覚と、軽率で浅薄な思想に対する軽蔑心は万人の認めるところであり、後者はこの当時のバジョットの心に強い刻印を与えている⁵⁾。

ブリストル・カレッジにおいてと同様に、ユニヴァーシティ・カレッジにおいてもバジョットは極度に良心的な学生で、常に極めて陰うつな予感を抱いて試験を受け、結果は最優等ではないにしても非常に優秀な成績を修めていた。彼は学問に関して以前ほど焦燥感や不安の念に駆られることはなかった。しかし様々な動機のために（その中では義務感と競争に対する熱意がきわだっていたが）彼はやはり成功することに熱心であった。時には差し迫った危険状態に直面した時ですら屈せずにより通し、いかなる努力も惜しなかった。常に病弱で、少年時代の猛勉強により少なからず損なわれた彼の健康は、1843年の夏には重大な警鐘を発するまでになった。彼は咳を病み、秋学期の間、大学を休学するよう説得された。彼は大学時代を通してしばしば苛酷な身体的苦痛の中にあっても、研究を続行した。

私は古典で優等賞を獲るのはあきらめようと心に決めました。そして以下がその理由です。土曜日、お父さんにあの短い手紙を書いたあとで、最後のためしにどの位勉強がはかどるかをみてみようと思ひました。しかし1時間もするとすっかり疲れ果てて、本の上におおいかぶさって眠ってしまいました。そして目をさましたとき、本当に頭の中がからっぽのように感じたので、決心がつきました。私は肩の痛みとかすかな呼吸困難に耐えて1日中、頑張り通しましたが、その苦しみは決して猛勉強の刺激となるものではありません⁶⁾。

この段階で彼の健康は翌日、少し持ち直し、彼は試験準備を続け、ついに三度目の優等賞を獲得した。別の機会に彼は試験における努力を次のように描写している。

私は試験に臨みましたが、残念なことに結果は惨々でした。自分が準備し、いくつかはほんの2、3日前に覚えたばかりの問題を『理解しようと』考えを集中させるには、大変苦しい努力が必要でした。計算問題を解いているときの努力は、頭がたいそう熱っぽく痛み、部屋全体が私とともにぐるぐる回っているようでしたので、いっそう苦しみに満ちたものでした⁷⁾。

後年、バジョットは肉体的忍耐の限界ぎりぎりまで努力することを学んだが、停滞は彼には出来ないことであつた。そしてひどい頭痛には、激しく熱中出来る活動が最も良い治療法であるというのが、彼の座右の銘となつた。この当時、バジョットは最も勇敢で率直な行動ですらも、幾分、不名誉と思われるような忌むべき状況に自ら置かれているのに気づいた。大学生に下宿を提供しているホパス博士 (Dr. Hoppus) のところに住居を定めてまもなく、彼はその家の二人の寄宿人がある不道徳な行為を行っているのに気づいた。その行いの正確な性質については、バリントン夫人は明らかにしてはいないが、バジョットは出来るだけその事実を信じまいと努めたが、我慢出来ずに学生達に嫌悪を表明したが、無駄であつた。何日も眠れぬ夜を過ごしたあとで、とうとうこれ以上沈黙しているのは、当の学生達本人にとっても、又、ホパス博士にとっても正しいことではないと決意して、『告げ口屋の役目』を演ずるという不愉快さに打ち勝って、全ての出来事を暴露した。バジョットは当時、ほんの16才であつた。

ユニヴァーシティ・カレッジを卒業して4年後に、バジョットは教育のよりいっそう重要な部分は、次のものに存すると書いている。

(それは) 個別指導教授や講義、体系化された書物ではなくて、ワーズワースやシェリーの中にある。すなわち万人が好むがゆえに読む書物、万人が興味をもつがゆえに語るところのもの、議論の白熱する散歩や、喧喧譁譁の漫歩—若々しい思想が若者の考えに与える衝撃、新鮮な思想が未熟な思考に投げかける衝撃、強烈な思想が熱い魂にもたらす衝撃—歓楽と論駁、あざけりと笑いの中に存する—何故ならこれらは自然のままの精神の自由な活動であり、大学教育を受けずに得られるものではないからである⁹⁾。

そこにみられる修辞学はマコーレイ的であるが、感情はバジョットのものである。さらにその趣旨は、通常の科目において確固とした基礎知識をすでに修得した者だけに洗練されている。観念がまだ形成されたばかりで茫漠としてあいまいであり、初めて力強さを感じる精神が、喜びの興奮でもって思想という宇宙を眺めるその時期は、彼が悔恨の気持で卒業し、満足感を抱いて思い起こした時期である。この時代の彼の手紙は、別の若者なら馬や競馬のことばかり書いたであろうが、詩人達や哲学者の名前に満ちている。ハットンが次のように詳説している。

かつてバジョットと私はいわゆる論理学上の自同律(AはAである)が論理的推論の法則に位すると称されるのか、あるいは単なる言語の先決条件にすぎないのかということに関しての議論に熱中するあまり、オックスフォード・ストリートを見出そうとしてかれこれ2時間余り、リージェント・ストリートをあちこちさまよい歩き、とうとう行き着かなかったことがあった¹⁰⁾。

バジョットは生涯の大部分を辺鄙な田舎の住居で送った。彼は配慮の行き届いた教育を受けていた。又、長年に渡る熱心で孤独な読書の蓄積ではちきれんばかりであった。突然に彼はいかにありがたいものであれ、両親の支配から解放され、ただちにロンドン生活という巨大な現実世界と、知的発見という、より巨大な非現実の世界に飛び込んだ。同年令の仲間達と共に、彼は壮大な冒険に乗り出した。彼がこの冒険を称え、その消滅を遺憾に思い、世間のあざけり、

嘲笑を恐れずに『壮重体で』語り、後もずっと自らの能力と将来性の優れていることに、不思議な若者らしい変らぬ自信を持ち続けることを可能にした、名門のピット(Pitt)に羨望を抱いたとしても不思議があろうか。「われわれは分別があるようにと努めるが、結局、平凡であることに落ち着いてしまう。われわれは奇矯であることを恐れるあまり、凡庸であることに終ってしまう」。ただ小ウィリアム・ピットのような人物のみが、「運命の女神から『自分自身であること』のこの上もない許可を受けているのである」¹¹⁾。しかしながら、われわれがこれから見ていくように、運命の女神は恐らくその割合は劣るにしても、バジョットに対してその許可を与えていたのであった。

精神の力強さと議論の巧みさのおかげで、彼はただちに学友の間のリーダーとなった。ユニヴァーシティ・カレッジでは非常に重じられていた討論で、彼は名人と認められ、ハットンやW. C. ロスコウ(W. C. Roscoe)と共に新討論会(the New Debating Society)を組織した。

ハットンは大学生のバジョットを次のように述べている。

若かりし当時のバジョットの態度には、しばしば傲慢なところがみられました。私達はよく彼の知的尊大さを攻撃したものでした。その尊大さとは、当時外面的には非常に目につきましたが、実際は彼の心の中にはないと私が信じていた性質でした。それにもかかわらず、知的な面で劣った者への彼の心からの輕蔑は、彼自身の能力を適切に認識することさえ、付随させませんでした。しかし大学で彼の皮肉っぽい『謹聴ノ』という言葉は、討論会において恐るべき響きであり、多くの年下の発言者の氣力を奪うものでした。さらに会話で雄弁すぎる表現に出会うときに発する『どの位?』という冷笑的な言葉は、数学用語で言うところの人間を『最下値』にひき下げるような種類のものでした¹²⁾。

ハットンは友人の行動の一つには彼の陽気さ、又、一つには次のようなことからのせいであろうと考えている。

彼の精神の著しい『超絶性』—換言すれば、盲目的な共感のものの感化力というもの—を彼はどちらかと言えば得られがたかったことにある…彼は確かに他人が感ずるであろうことに対するあの敏感な本能を少しももたなかった。その本能とはしばしば人間の思想と、さらには人間の言語を穩健で慇懃ではあるが、無意味で無価値な形式に形

造るものである¹²⁾。

これらは全てその範囲だけでは、たいそう丁重で真実味にあふれているが、バジョット夫人は悪人自らに対して(バジョットに対して:訳註)問題をいっそう明確に述べている——「レイノルズ氏がおっしゃるには、もっかのところのあなたの欠点は、あなたの年頃の自分を想い起こさせるそうです。つまりあなたは権威ある人の正しい点に謙虚な気持で従ったり、敬意を払ったりするよりも、彼らの揚げ足をとったり、攻撃をしたりすることの方がはるかに好きなのです」¹³⁾。全ての著作においてバジョットは批判的な批評を書いているときほど一気呵成で手際の鮮かであることは恐らくないであろう。ヒーローを攻撃する者は往々にしてまた知能の劣った子供を抹殺することに反対はしないものだ。若い時には特に、理解の早い者と遅い者の間には自然な反感がしばしばみられる。シェークスピアの戯曲の中でとりわけ『尺には尺を』(*Measure for Measure*)は『愛着と感興をもって』書かれたように思われるというハズリット(Hazlitt)の意見を引用しつつ、バジョット自らは次のように述べている

さて作品の印象的な特色である、アンジェロの性格全体は快樂しかも邪惡な快樂の巧みな具体化にはかならない。そして度量の大きい熱血漢は、無類な人間、危険人物や圧迫された冷血漢がただ漫然と増え続けることを觀察するのを楽しんでいる。まるで輝く瞳と大きな口と快活な顔をしたシェークスピアが心地よい興奮でもって、薄い唇をした打算的な彼の創造物が過剰になるのを見守っているのが目に浮かぶようだ¹⁴⁾。

同様にわれわれにも輝く瞳と大きな唇をもったバジョットが同じように『心地よい』興奮でもって、勿体ぶった討論者を觀察している姿が目に見えよう。実際、単なる『社会の接合剤』(social cement)であること、言葉を『穏やかで慇懃な形式』に適合させ、愚鈍さ、愚行を黙認することは全く馬鹿げたことである。それよりも苦しみ、煙にまき、ショックを与え、覚醒させ、狼狽、驚愕させる方がたとえようもなく痛快なことである。人間には尊大な陳腐さと雄弁な虚偽を粉碎する力があり、自らの力を行使することに喜びを感じるものである。人間は愚者を打ち負かす巧みなわざをもち、それを発展させたいと思うものだ。人間は理想の追求に熱心で、愚者は大いにその障害となるのだ。

時間はバジョットに彼の『傲慢さ(üßpis)』を隠し、抑制することを教えた。彼はソクラテス的問題提起にとりつかれ、血のにじむような苦勞もせずに自己の無知なる部分を抹殺する方法を学んだ。非常に若い頃に彼は社会的な実験の技術を発展させたが、生涯ずっと正真正銘の素人博物学者であった。退屈な人間、傷善者、勿体ぶった人間は、常に彼の特別な注意を集めた。しかし彼の親友でさえも、苦痛を与える生体解剖は受けずにすんだようであるが、時として彼のモルモットとなった。

博物学者はおっとせいのようなものを博物学では『異常型』と呼んでいると思います。それは長い過去によってのみ説明可能で、現在の『環境』ではどこなくぎこちなく泳ぐ、奇怪な形をしたものです。さて『クラブ君』(Old Crabb)は(少くとも私にとっては)ちょうどそのようなものです。あなたは興味と喜びをもって彼の特異な身ぶりと奇妙なしゃべり方を観察して、まるで記憶を保つためであるかのように、こうつぶやきました。「そして『この人』がかってゲーテの友人であり、現在はワーズワースの友人なのだ！」クラブ君にはある種の動物的おかしさがあり、そのために彼をそのような偉大な人々と結びつけることは、一種の知的な冗談となりました。しかし彼は心から彼らと密接に結びついていたのでした¹⁴⁾。

実際、バジョットにとってただ親愛なるクラブ・ロビンソンだけでなく、しばしばその他多くの人間が水族館の中の奇妙な動物にすぎなかった。ロビンソンの主催する有名な文人のための朝食会は、実験のための類稀な機会を提供した。ゲーテとワーズワースの友人である彼は、全く申し分のない主人とは言えなかった。彼はお茶を入れるのを忘れ、錠を失くし、際限なく続く長話で食事の準備が遅れ、ようやく食事が出される頃には客の空腹感は苦悶の状態にまで達していた。

彼の客のうちで抜け目のないものは(バジョットの言によれば)よくやって来る前に朝食をすませたものでした。それで事情を知らない真面目な文学者が、一方はミルクだけで砂糖を与えられず、もう一方はトーストなしのバターのみでお茶にありつけずに物語を3つも聞かされて音を上げているのを観察する大変な楽しみがあり、さらにシラーやゲーテに関して論議を引き起こすことによって、来たるべきごちそうを確実に邪魔するような質問をこっそりすることへの興味もありました¹⁴⁾。

ハットンの説明によると、

ここで言及された唯一人の『抜け目ない』人間は、私が思うに、バジョットその人でありました。面白いことに、彼はこのことはクラブ・ロビンソンのところの朝食会に出かける前に彼がいつもする予防措置であると私に打ち明けました……その対策としてなら勿論誰でもそうすることなのかもしれませんが、バジョットがクラブ・ロビンソン主催の朝食会におけるこの欠陥に単に気づいただけでなく、いわば基本方針の中心にすえ、他の人々の忍耐力を試すためのいたずらっぽい策略の機会とするほどに心にはっきりと留めていたのは全く彼らしいことでした¹⁵⁾。

ハットンは彼自身の弱点も時には実験者に観察されていたということは述べていない。彼は大変親切で寛大な人間であったが、道徳観に少し偏狭なところがあり、他人を非難することにおいては、かなり滑稽なほど手きびしかった。バジョットはしばしば『人間の性質における弱さの大部分に対して、皮肉なほど寛容な見解』¹⁶⁾を抱くことによって道徳に関するハットンの憤激の爆発に衝撃を与えた。

バジョットは1846年に数学で学士号を、1848年には主知哲学、道徳哲学で修士号とともに金メダルをというように最優等でロンドン大学を卒業した。知的職業の価値と道徳性に関してのいくつかの疑念が先行したものの、まもなく彼は共に当時の著名な法廷弁護士であったホール氏(Hall)と後にはクエイン氏(Quain)のもとで法律を学び始めた。

第二章 原文註

- 1) Bagehot, "Shakespeare—The Man," i. 219.
- 2) p. 3.
- 3) *University College, London*, pp. 1, 6, 78.
- 4) Unpublished Letters: October 15, 1842; September 2, 1846; September 9, 1846.
- 5) Belliot, *University College*, pp. 82-3.
- 6) Quoted by Mrs. Barrington, p. 115.
- 7) Unpublished Letter: about November 1846.
- 8) Quoted by Mrs Barrington, p. 102.
- 9) "Oxford," i. 170.
- 10) p. 4.
- 11) "William Pitt," iv. 5-6.
- 12) Pp. 7, 8.

13) Quoted by Mrs. Barrington, p.146.

14) "Shakespeare," i. 252; "Henry Cabb Robinson," V. 52, 53.

15) P.9.

16) Mrs. Barrington, p.106.